

# I-3

学園創立者 清水安三・美穂・郁子  
清水郁子

## 「新しき女性」像の追求

1935年から崇貞学園の教育に参画した清水（旧姓小泉）郁子は、現在の島根県松江市西津田にて、1892年10月2日誕生した。島根県立松江高等女学校を卒業の後、1911年、東京女子高等師範学校に入学。学内の活動を通じて青鞥社の運動を知り、その支持者となり、「新しき女性」への自己変革を模索していった。同校在学中、級友たちと市内の教会に通い、受洗した。卒業後は、長崎県立女学校、明石女子師範学校で教鞭を取っていたが、「婦人会関西連合大会」や「婦人政談演説会」などの集会に参加した。婦人問題のリーダーになりたいと教職を辞し、1922年、母校研究科に籍をおき、東京帝国大学の聴講生となって研究活動を始めた。しかし、山室軍平の説教に触れ、女性の真の自立はキリスト教の愛の精神を基底とした社会への積極的な活動によるものと考えに至り、救世軍の活動に参加、その支援を受けて1922年渡米、オーバリン大学神学部に入學した。在学中、後の連れ合いとなる清水安三と出会った。オーバリン大学神学部を最優秀の成績で卒業の後、ミシガン大学大学院で教育学を学び修士号を取得した。さらに博士課程に進み、ドクター論文の資料収集のため、1930年4月帰国した。



■東京女子高等師範学校時代  
郁子は1915年3月、同校を首席で卒業した。  
（『夢は成る』より）



■『青鞥』創刊号（1911年9月）の表紙  
郁子は東京女子高等師範学校在学中、学内の文化活動を通じて「青鞥社」の運動を知り、その支持者となる。  
（国立国会図書館蔵）



■1915年当時の富士見町教会  
卒業間近の1915年1月28日、植村正久牧師から洗礼を受けた。  
（日本基督教団富士見町教会提供）



■「エレンケイの思想より」（部分）  
郁子は、同文章の中で「教育制度は男女共学がよい」と、明石女子師範学校教員時代にすでに「男女共学」に関心を抱いていた。  
（『心の玉』明石女子師範学校校友会誌35号、1920年12月）



■オーバリン大学留学当時の郁子  
郁子（前列から2列目の左から5人目）と安三（3段目右）が写る。郁子は1924年から27年、安三は1924年から26年の間、オーバリン大学神学部在籍しており、学友としての交流があった。  
（初版『石ころの生涯』より）



■ミシガン大学大学院、マスターオブアーツを授与された時の郁子（1928年6月）



■山室軍平（1872年-1940年）中佐時代の肖像  
山室軍平の説教を聞き、女性の自立は知性ではなく愛が基底となるべきとの考えに至り、救世軍の活動に加わっていた。  
（山室軍平記念救世軍資料館提供）



■救世軍制服姿の郁子  
渡米後、救世軍の士官学校で学んだ後、救世軍の一員としてカルフォルニアで活動していた。



■ミシガン大学大学院時代の郁子と学友  
後ろから2列目右から3人目が郁子。アジアの女性を対象とするパーバースカラシップを受けていた学生たちの交流集会の時の写真と推測される。

# I-3

学園創立者 清水安三・美穂・郁子  
清水郁子

## 婦人運動家・思想家として

郁子は約8年間に及ぶ留学生生活を終えて帰国した。提唱する男女共学論は危険思想とみなされ就職問題に苦勞したが、翌年、青山学院女子専門部教授に就任した。帰国した1930年の6月を皮切りに、同年30点以上の言説を雑誌などに寄稿して、男女共学論・婦人問題に関する思想家として言論界に登場した。『東京日日新聞』の身の上相談回答者の一人にもなり、その言説の範囲は学術的な論考から日常的問題まで幅広く、5年間で3著書を上梓した。その一方、「男女共学研究会」の組織化、「新教育協会」の理事、「女子中等教員会」の組織化とその役員、母校の同窓会組織である「桜蔭会」関係の種々の委員を歴任、特に女子師範大学設置運動の中樞を担った。1934年8月、ハワイで開催された第3回汎太平洋婦人会議にガントレット恒とともに日本の正式代表として参加した。同会議での軍事教育に関する発言が舌禍事件に発展した。その後、清水安三からのプロポーズを受け入れ、結婚を決意、中国に向かった。



■帰国（1930年）後、言論界で活躍していた頃の郁子  
青山学院教授として教鞭を取りつつ、男女共学論、婦人論の分野での言論活動を展開していた。（『夢は成る』より）



■小泉郁子著『男女共学論』  
日本における男女共学論の先駆的書。民主的  
社会への改造は、性差  
によらず個性による教育  
の平等を保障した共  
学制の教育によると主張した。  
(1931年、托人社、全135頁)



■小泉郁子著『明日の女性教育』  
人格的・経済的・社会的に自立した女性であることの重要性を説いている。  
(1933年、南光社、全223頁)



■小泉郁子著『女性は動く』  
世界の婦人運動の動向を紹介、運動による婦人地位向上を強調している。  
(1935年、南光社、全329頁)



■新聞掲載記事「熱が足りぬ……」  
「婦人公民法案」が議会で保留となったことに対して、婦人たちの熱意が足りないとの郁子の主張。  
(『読売新聞』1931年2月26日付)



■第3回汎太平洋婦人会議参加の日本代表  
右端が郁子、左端がガントレット恒、会議は8月8日から22日開催された。  
(『聯合婦人』62号、1934年10月／村上正子氏、公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センター所蔵)



■軍事教練反対決議を報じる汎太平洋婦人大会記事  
郁子が決議に賛成したと名指しで報じている。後に舌禍事件に発展した。  
(『読売新聞』1934年8月20日付朝刊)



■「四十三の花嫁 小泉女史が“青春よサラバ”の新聞記事  
郁子の安三との結婚を報じた記事、右が郁子、左が吉岡弥生。  
(『読売新聞』1935年6月5日付朝刊)



■小泉郁子女史祝賀会  
左から3人目が郁子。同会には安井哲、山田わか、ガントレット恒、守屋東などが出席。郁子の中国への旅立ちと『女性は動く』の出版を祝った。6月4日、白木屋食堂で開催。  
(『連合婦人』71号、1935年7月／村上正子氏、公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センター所蔵)

## I-3

学園創立者 清水安三・美穂・郁子  
清水郁子

## 教育実践者として

1935年7月、郁子は北京に赴き、「中国の女性たちを育てたい」との抱負を胸に崇貞学園の経営に参画した。郁子着任後の学園は、中学部認可、男女共学の実施、日本女子中学部設置、高等女学校の認可など、学校制度を拡充した。また、講堂・図書館・標本室・体育館などの建設を安三とともに進め、教育活動を充実させた。女性の自立に強い関心をもつ立場から、特に体育教育に力を入れた。学校経営のかたわら、宋美齡や胡適らと会話し民間外交に尽力する一方、中日婦人親和会理事、北京基督教婦人矯風会の設立及び代表、セツルメント北京天橋愛隣館の現地委員会委員長などを担った。敗戦となり、崇貞学園を北京市に接収され帰国した。1946年5月、安三とともに桜美林学園を設立した。創立当時、GHQの部局である民間情報教育局（CIE）から教育顧問にとの要請もあったが、学園の教育に専心、4年生大学設置にむけての準備中の1964年6月24日死去した。没後50年以上を経て、「小泉郁子賞」が母校、お茶の水女子大学に設置された。



■ 崇貞学園の庭での生徒らと郁子（1940年前後か）  
前列右から2人目が郁子。郁子は学園内で中国服を着用していることが多かったという。人物の後ろに見えるのが「愛の鐘」。  
〔清水安三と北京崇貞学園〕不二出版、2009年



■ 桜美林学園の学生と歓談する郁子  
特集「第1線の女流100人衆」の一人として紹介、掲載された。  
〔主婦の友』38巻6号、1954年6月／国立国会図書館所蔵〕



■ 郁子著「西安事変後初めて蒋介石夫人に会ふ」（部分）  
1937年3月、日中両国婦人間の協力による平和の実現の話し合いを目的として蒋介石夫人の宋美齡に会見した。  
〔婦人公論』22巻5号、1937年5月／国立国会図書館所蔵〕



■ 「北京中日婦女親和第4周年記念大会」（1942年）  
郁子は前から3列目左から2人目。郁子は同会の組織化に参加し、日中の婦人たちの交流とともに婦人の社会参加を呼びかけた。



■ ホノルルでの「清水郁子女史の講演」チラシ  
題目「新時代の女性」。1952年2月から53年3月までの間、渡米して安三とともに募金活動に従事、その帰路ハワイでの活動。  
〔マキキ聖城キリスト教会提供〕



■ 郁子の自筆講義ノート  
短期大学では、教育原理・教育課程論・英語科教育法などを担当。



■ 晩年の頃



■ 学生たちに担がれ、学園内を巡る郁子の棺  
1964年6月24日死去。「己れを捨て十字架を背負う」との聖書のこぼを最後に、71年余の生涯を閉じる。1964年7月5日学園葬。



■ 「小泉郁子賞」のオーナメント  
「お茶の水女子大学賞」の一つとして2016年設けられ、毎年1名に授与されている。  
〔お茶の水女子大学提供〕